月刊

JMITU ディスカ

「欲」

12月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ　グループ分会　2025年発行

No,492

深夜残業、勤務間インターバル制度

高市首相は、厚生労働大臣に対して、「心身の健康維持と従業者の選択を前提にした労働時間規制の緩和の検討」を指示しています。

人口減少が続く中で、企業の人手不足は深刻になっているが、残業規制が強化されたことで、それに拍車がかかっている。こうした状況を受けて産業界などから残業の上限規制の緩和を求める声が上がっている。

現在の残業上限（月４５時間、繁忙期でも月１００時間未満）を見直す方向性を示しました。

国会答弁で「残業代が減ったことで、生活費のために慣れない副業をして健康を損ねる人が出ることを心配している。」などと言われていますが、

そもそも残業をしなければ、生活が困難という賃金体系に問題があります。

過労死ラインに触れる規制緩和、ワークライフバランス軽視の発言でしかありません。

そもそもなぜ、残業代が割増賃金になるのかの意味も分かっていない発言です。割増賃金は会社への罰金です。

勤務間インターバル制度とは、退勤から次の出勤までに一定の休息時間を確保する仕組みであり、労働者の健康保持と生活時間の確保を目的としています。

現在は努力義務にとどまっていますが、２０２７年４月からは終業から翌始業まで １１時間以上の休息を確保することが法的義務となり、違反時には労働基準法の罰則が適用される見込みです。

この改正は、過労死や過労自殺の深刻化、睡眠不足によるメンタル不調の増加を背景に進められています。例えば２２時に退勤した場合、翌日の始業は９時以降としなければならず、２３時まで残業した場合は翌日の始業を１０時以降に繰り下げる必要があります。

特に深夜残業が常態化している職場では、翌日の勤務開始を調整する仕組みが不可欠です。

長時間労働は休職の主要な要因の一つであり、心身の不調を通じて労働者の生活に深刻な影響を及ぼします。

過度な残業や深夜労働が続くと睡眠不足が常態化し、うつ病や適応障害などのメンタル不調を引き起こしやすくなります。厚生労働省の調査でも、精神障害の労災認定件数は増加傾向にあり、背景には長時間労働があるとされています。

休職理由としては人間関係不和と並び、長時間労働が大きな割合を占めています。

会社にとっても、従業員の休職は生産性低下や人員不足を招き、安全配慮義務違反として訴訟リスクを抱える可能性があります。

防止策としては、勤務間インターバル制度により従業員は十分な睡眠と生活時間を確保でき、ワークライフバランスの改善につながります。

仕事と生活の調和が実現すれば、心身の健康維持だけでなく、家庭生活や自己研鑽の時間も確保でき、従業員の満足度や定着率が高まります。

企業にとっても、健康維持による生産性向上、長時間労働の抑制による離職防止、公平で持続可能な労働環境の構築といったメリットがあります。

掌編小説

大人先生

仙洞田一彦

私たち二年八組の担任の先生を、別の教科の先生が「先生仲間では『たいじん』と呼ばれている」と言った。その先生と我が担任の特別の親しさの表現と取る事もできる。しかし、その響きに揶揄の響きが含まれていることは、高校二年生くらいになると分かる。それは、「お前たち、外れだな」という、なぐさめと同情だ。

漢字で書くと「大人」。「おとな」でなく「たいじん」と読む。「たいじん」と読むときは徳の高い、立派な人のことを言うらしい。今から六十年以上も前のことで、手元に卒業アルバムもないので名前が定かでない。おぼろげながら浮かぶ苗字もあるが、とりあえず大人先生と呼ばせてもらっても、叱られないだろう。

大人先生は商業簿記を教えていた。当時、確か定年は五十五歳だったと思うから、大人先生は五十代半ば。私の両親より少し年上か。当然、戦争体験はあるだろう。

当時、教師には軍隊を連想させる人もいた。中学時代、学校の廊下、教室に上がる時は、下履きから上履きに履き替えていた。ところが、上下履き替えない生徒が何人かいた。ある日担任が、その生徒十人くらいを、教室の前の方に並んで立たせ、みんなの前で次々にビンタを食わした。

高校時代は、「君が代」を生徒に歌わせるとき、必ず前に出て指揮をとる先生がいた。変だなと思ったのは卒業し、就職して何年か経ってからだ。

音楽の先生でもないのに何故だと思わせた。きっと教育の場に「君が代」問題があることを知ったからかもしれない。

大人先生は布袋様のようなお腹をしていて、背は一六〇センチなかばくらい。髪は薄くはなっていたが、禿げ頭というほどではない。丸顔だが皺のせいか、全体グシャッと少しおしつぶした感じ。老眼かどうかは知らないがメガネを掛けていた。私は洋服仕立職人の倅だから、高級かそうでないかはいくらか分かる。高級そうではない、はっきり言って安物のような薄茶色の背広をいつも着ていた。背広の前のボタンが、かけられているのを見たことはない。

「たいじん」と揶揄の響きを持って言われたのは、生徒である私にもすぐに見当がついた。授業中、私語、無駄口で少しぐらい賑やかになっても叱ることはなかった。時折みんなの様子を眺めているときもあったが、静かなまなざしを感じさせた。悠々と授業を進める。動揺せずに授業は続けられる。だから「たいじん」と呼ばれるのだろうと、私は思った。一年間、声を荒げるような場面に接した記憶はない。

授業終了後、教室、廊下の掃除をして帰る。当番が決まっていて、交替で掃除するのだ

が手抜き。先生も先生なら、生徒も生徒というわけだ。いや恩師のせいにしてはならない。しかし、授業中も注意されることがないから、そこにつけこんだ手抜き掃除だ。

長い廊下の端で身を屈めて眺めると、我が教室の部分の廊下だけが、ざらざらと砂かほこりをかぶっているように曇って見える。隣のクラス担任は世界史を教えるクリスチャンの先生。クリスチャン先生すべてがそうなのかどうかは分からないが自分も雑巾を持って、掃除当番の生徒と一緒に掃除をする。廊下の両側の腰板までも、雑巾で丹念に拭いている。

下を見ながら廊下を歩いても、教室の境界が分かる。そのクラスのところの廊下は外の光を反射しているけれど、我がクラスの廊下は、同じ板の続きであっても光を反射していない。

いまいる私の部屋の、およそ掃除とは言えない掃除のいい加減さを、大人先生の教育のせいだと言っているわけではない。

どっしりした体形から存在感がないとは言えないが、無口で目立たなかった。しかし、大人先生には手相を見るという強力な武器があり、生徒に人気があった。易者風の羽織、袴を着け、縁のない帽子をかぶり、天眼鏡でも持たせたら様になりそうだ。

手相見も易者同様、当たるとか、外れるとかいうのかどうか分からないが、大人先生なら当たりそうだ。時折、生徒が大人先生を囲んで、手を差し出している光景が見られた。生命線がどうとか、こうとか言っている。

私も手相を見てもらった。

「これは大器晩成の手相だ」

大人先生が私の手のひらをしばらく見た後言った。当時はまだ十代。「晩成」とは何歳くらいの事か。いずれにしても遠い話。なんとなくふわふわと手ごたえのない印象。しかし「将来は、あまり期待が持てそうもないなあ」などと言われるよりは、希望が持てないこともない。

大人先生の手相見の姿を思い出すと必ず、学年最後の授業を思い出す。高校二年の三月のことだ。翌日から春休みで、いくらか浮き浮きした気分があったかもしれない。

「高校二年最後の授業だ。この一年の思い出を、みんなから言ってもらおう」

順番に立って、クラブ活動のたのしみ、スポーツクラブなら好成績を収めたこと、そのために頑張ったこと。修学旅行も、多くが語った思い出だった。教室の雰囲気も、なんとなくワクワクしてきた。私も言った。

「放送部の活動で、みんなでラジオドラマを作ったことです。セリフや効果音を工夫しながら作ることは楽しかった」などと言ったのではないかと思う。

商業高校で進学校ではなかったからかもしれないが、高校の三年間は放送部の活動に

始まり、放送部の活動に終わったと言える。高校入学当初は、ラジオのような機器に興味があった。昼休み時間のうち十五分くらいだったと思うが、毎日ディスクジョッキー、朗読、クラシック音楽などの番組を流していた。アナウンサーをやったことはないが、番組の原稿を作っているうちに、書くことに興味が移ってしまった。三年生になった時は、ついにラジオドラマ執筆にまで手を出した。県のラジオドラマコンクールで四位、というと聞こえは良いが、コンクールには四校しか参加していなかった。十校参加していたら十位だったかもしれない。

ドラマは就職活動の悩みを主題に書いた。自分たちもちょうど高校三年生、当時はやっていた「高校三年生」を、バスの中、みんなで合唱する場面を入れた。

審査員の批評を今でも覚えている。

「貸切バスでもないのに、歌うのは非常識」

と批評された。たしかにそうだ。

全員、五十人近い生徒が語り終わった。

最後に大人先生が、ちょっと下を向いて間を置き、顔を上げると静かに一言。

「学校は勉強するために来るところだが、学校の授業、勉強にはだれも触れなかった」

教室が水を打ったように静かになった。意表を突かれた感じだった。大人先生はそれ以上、何も言わなかったように記憶している。

この言葉は時折思い出す、印象深い言葉だった。この最後の授業を先に思い出せば、つづいて手相のことを思い出す。手相の大器晩成を先に思い出せば、つづいて最後の授業を思い出す。大人先生の思い出の、この二つは切り離せない。

当時の大人先生の年齢より、もっと歳が上になった頃、定年退職後の事だったと思うが、大人先生に手相を見てもらったことを思い出した。

それまでの生活と、当時の自分を振り返って見ると、大器晩成などとは程遠い生活だ。その時ふと、手相を見た時に言う大器晩成という言葉は、相手を傷つけずにすむ、無難な言葉だと思ったのだ。

言われた者が歳取って「大器晩成」していなくても、言った大人先生はすでに鬼籍。

「先生。外れたじゃないですか」

と、恨んだところでどうにもならない。大人先生にしてみれば、恨まれようが、何されようが、墓の下ではどうということはない。もしかすると「フフフ」と、笑っているかもしれない。大人先生は笑っても声に出ない。唇の形が、開いているかいないかの微妙な状態。しかし、見ると明らかに笑っている顔に見える。

「大器晩成」とは、誠に都合の良い言葉だ。クラスのほとんどが大人先生に手相を見てもらったのではないか。私だ

けでなく、何人が「大器晩成」と言われただろうか。私以外にいないはずがない。言われた奴ら、歳を重ねていまある自分を考え、大人先生の言葉を思い出し、私同様苦笑しているのではないか。

大人先生に、してやられたと。

それからさらに二十年近くが経った。ついに女性の総理大臣が誕生した。時代の進歩か、変わり目か。だが、きな臭い。

寒くて布団から出たくない。目を開けて天井をにらんだとき、「大器晩成」の別の解釈がひらめいたのだ。分かっている人にとっては何をいまさらと思われるかもしれない。私には新鮮にひらめいた。これは手相を見た時のはぐらかし、言い逃れの言葉ではなかった。希望を失いくじけそうになった時のための言葉ではないかと思ったのだ。

くじけそうになった時、大人先生の「大器晩成」の言葉を思い出せば、私にはまだ先がある。手相がそれを証明しているのだ。生きよう、となるだろう。若い者にとっては希望の言葉かもしれない。

手相見の大人先生は、これから先、長い人生を送る生徒、私たちに「大器晩成」という言葉を贈ってくれたのだ。悲観することはない。先を見よと、解釈できる。

目を閉じて過去を振り返って見た。私はこの言葉に励まされたことがあっただろうか。大人先生に「してやられた」などと振り返っているくらいだから、なかったんだろうな。

晩年と言われる歳になってからひらめいたのでは遅すぎる。しかし、こんな歳でも「晩」がまだ続くと思えば、この先「成」があるかも知れないのだ。

そう解釈すると、これまで二つ別々の記憶だったのが、今朝、結びついた。

誰に聞かれる恐れもない。声を出した。

「まだ先がある。希望がある」

そして最後の授業の大人先生の言葉の本意。

「本来成すべきことを見失うな」

別々だった大人先生の教えがひとつに結びついた。

「よしっ」

気合を入れた。すると、

「フフフ」

大人先生の笑い声が聞こえた。耳が遠くなってから空耳が多くなった。頭を枕に付けたままじっとしていた。この笑いは何だ。

――おまえ、今頃気付いたのか。高二のときと、すこしも変わってないな。何もわかってない――

ナニクソッ、両腕を布団の外に出して伸ばした。体をねじって横向きにし、右ひじに力を入れ、立ち上がろうと力を入れた時、あれっ動悸が少しおかしい。心臓附近が締め付けられるようだ。あわてて力を抜き、布団に仰向けになった。そろり、そろりと手を伸ばし、掛け布団を、顎まで引っ張り上げた。